昭和63年9月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 25

街を美しく

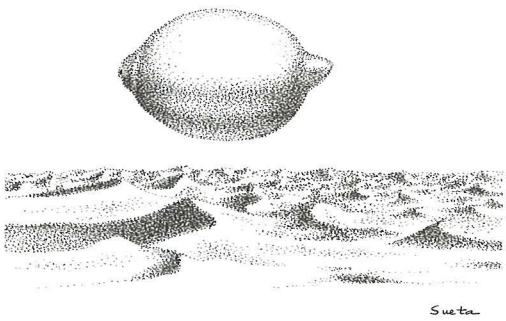
竹内　澄夫

年に何度か、高知市内の一斉清掃が行われているが、このこと自体大変結構なことであり、私共建設業界も夏の鏡川清掃には毎年参加している。一年間の塵は相当なものであり、考えてみれば原因を作らないことが第一である。

私の住む唐人町には台風災害後、道路と川の間に緑地が出来、道路側には柘（つげ）、川側には芝生が植えられ、所々にはベンチも置かれ、見違えるほどの憩いの場となった。あれからもう十余年が経過したが、柘は虫に喰われ、芝生は雑草に負け、空缶はゴロゴロところがり、正に塵捨て場同然である。

私は、出来た当時から柘の刈り込み、芝生の中の草引き、年に二、三度の消毒と、隣のホテルの親父さんに負けない程度にやって来、現在も続けているため、まあまあといった具合いで散歩をする人にも不快感を与えていないつもりである。しかしながら、上、下流は草茫々、せっかく造ったものの、後々手入れをしなければ却ってない方がましである。

昨今瀬戸大橋が開通し、市内のホテルは連日満員のようであるが、なおさら街の美化については、役人も市民も今一度考えるべきではないか。土佐に来られた全国のお客様、気には掛けなくても妙な所には割合眼が届くものであり、一度ならず二度、三度と来て頂けるような街であってほしいと思う。



「ON SUNDAY MORNING」
末田光一

観光地ばかりでなく、お客さんの中には旅館の近辺を朝早くから散歩する人も多い。〝駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまたわらじを作る人〟の類で、〝煙草を売る人、投げる人、そのまた殻（もく）を拾う人〟、シンガポールでは投げ煙草は「罰金六万円也」だそうで、街も実に美しい。

先日の土曜日、隣のホテルで客待ちをしていたタクシーの運転手さんに「オジサン！」と突然声を掛けられた。ちょうど私が柘を刈り込み、芝生の草を引き、そこに植えてあるアメリアの玉を丸く刈り揃えていた時であった。

「役所はやってくれんかよ」

ぶっきら棒に話し込まれ、今日までの経過を話すと、

「オジサン、なかなか上手（うまい）のう……」

「十年もやると、そこそこになりますぞね！」

ということで、話も途中で車はお客さんを積んで東向けに去った。上手、下手は別にして、美しくなることは誰が見ても気持ちがよいものである。さてあの運転手さん、窓からは投げ煙草は……多分しないだろうなあ。

市民一人一人がその気になれば、街はひとりでに美しくなるように思えるのは唯に私一人ではないと思う。すみれ色に染まった空が美しい夏の夕暮れである。

（㈳高知県建設業協会会長）

森田正馬と土佐人気質

大原　健士郎

森田正馬（まさたけ）は、富宗村（現在の野市町）が生んだ、世界的に有名な精神科医である。今年は没後五十年に当たり、記念祭が去る七月十七日、地元野市町や高知市で盛大に挙行された。

森田は、神経症に効果的な〝森田療法〟というわが国独自の精神療法を創始したことで有名であり、この療法は、現在では、精神分析療法と並んで、わが国の神経症治療の二大主流となっている。

森田がこの療法を樹立したのは一九二〇年頃であり、当時は神経症という言葉も存在せず、今でいう神経症の状態は、神経衰弱という名称で一括され、神経の衰弱から生ずるとされていた。フロイトの精神分析も性欲説をあらわにした形で日本に輸入されたばかりで、神経症に有効な治療手段は、何一つ存在しなかったのである。

しかし、森田は天才的なひらめきからこの治療法を開発したのではなく、実に二十年もの歳月をかけて、試行錯誤の末にようやくこの療法をつくり出したのである。

森田がこの治療法を考案した背景には、多分に土佐人気質が関係しているように思う。

まず第一に、森田は素直で「純な心」の持ち主であった。見る物、聞く物、何でも素直に受け入れた。例えば、骨相学や占いに凝ったこともある。あまりに凝り過ぎて、父親が「占い師になりはしないか」と嘆いたこともある。しかし、一度試みてみて、科学性のない物、信用できない物は、すべて捨てていったのである。

第二は、限りない探究心である。森田は催眠術の名人であった。しかし、森田療法には催眠療法はとり入れられてはいない。なぜなら、催眠療法は、一部の神経症には効果的ではあっても、大多数の神経症には無効だと知ったからである。

森田は、当時神経症に有効だといわれていた治療を、すべて実際に、患者に行ってみた。リンゲルを注射したり、ブロバリンや阿片チンキも飲ませてみた。また、デュボアの説得療法を用いて、むずかしい理屈で患者を説得したり、ビンスワンガーの生活正規法を応用して生活療法を試みたり、安静療法を施行してみたりもしたが、結局良い結果は得られなかった。そのため、各治療のエッセンスをとり出し、それらをうまく組み合わせ、安静、作業、説得などからなる森田療法を創り出したのである。

第三は、森田の負けず嫌いな性格である。森田はなかなか闘争的で、勝気で、絶対に「参った」とは言わなかった。学会での討論はもちろんであるが、トランプや将棋も好きで、負けるのを極度に嫌ったそうである。闘争的な反面、ねちっこく辛抱強い側面も持っており、勝負師としての資質を十分に備えていた。

第四は、温かい人間愛の持ち主だったことである。大学時代に休暇で実家に帰ったとき、母親の言いつけで、小作人に年貢米の催促に行かされたことがある。しかし、その年は不作で、病人も多かったと小作人がこぼすと、年貢米を随分負けてやったことがある。また、熱海に『森田館』という旅館を購入したが、これは金儲けのためではなく、息子正一郎が死亡して、自分には跡継ぎがなくなり、妻の余生を考えて、借金までして買い求めたようである。

森田療法では、「気分（症状）をあるがままに受け入れ、やるべきことを目的本位にする」というアプローチがとられる。換言すれば、「健康人らしくすれば、健康になれる」というのである。極めて指示的な治療法である。そこに、患者に対する愛情がなければ、どうしても、冷酷な治療法になり下がってしまう。森田療法が、家庭療法とか、教育療法だとかいわれるのは、その背景に強い人間愛が存在するからに他ならない。

このように記してくると、世界的に有名な森田療法は、意外に土佐人の持つ性格・特徴を土壌にして形成されていることに気付く。つまり、土佐人気質がなければ、森田療法は存在しなかったのかもしれない。これは、土佐が生んだ牧野富太郎、寺田寅彦などにも同じように言えるのかも知れない。

（浜松医科大学精神科教授）

作歌に最も燃えた時

田所　妙子

夕暮れのさし迫った私にも、次の歌のようなロマンチックな短歌初学の頃があった。

名もゆかし君影草の咲くと言う
北のみ国はあこがれの国

山紫水明の地、横浪三里の入口宇佐湾の青い海を眺めて私は乙女となった。

ワンラインの袴をつけて県立第一高等女学校の生徒として四年間、高知市で学生生活を送った。下宿しはじめの頃は家が恋しくて、土曜日を待ちかねて家に帰ったものである。学校がはねるやすぐに荒倉峠を歩いて家に帰り、一晩家に寝て翌日曜日にはまたてくてくと荒倉峠を歩いて十里の道を往復したものであった。今の車社会から思えば何と隔世的な六十年の歳月であろう。

作歌を始めたのは兄横波銀郎の影響によるものである。その頃、朝鮮（現在の朝鮮民主主義人民共和国）黄海黄州の農場に勤務していた兄銀郎が細井魚袋に師事して歌誌真人に入っていた。時々帰省しては、その兄が自作の歌を朗詠しては得々としていた。その歌に魅せられて、見様見真似で作り始めたのが病みつきとなり、私も真人に入社して細井魚袋に師事した。

結婚後、兄の居る朝鮮に渡り、終戦までの十二年間を暮らした。終戦の昭和二十年に引き揚げ、二十四年影山聖二さんの発行しておられた高知歌人に入会、二十六年より発行を私が引き継ぎ、以来四十年営々と発行を続けてきた。歌も一回の欠詠もなく作り続け、一年に百首としても十年で千首、四十年で四千首の歌を作ってきたわけである。

その間、一番作歌に燃えた時代と言えば、三十年頃より四十年頃ではなかっただろうか。

昭和三十七年一月十九日付の朝日新聞社会面トップに「同人雑誌に死刑囚短歌、教え励ました一年」という見出しで出された記事は各方面の読者を感激させ、「人の命の尊さを知りました」とか「絶品には泣かされました」との手紙がたくさん寄せられた。その中に、「平尾静夫さんの最後を私は知っています」という、宮城拘置所に服役中、教育課の図書夫、また三十六人の死刑囚の看病夫をしていたという人が名乗りを挙げてきたりして、一つの話題を提供した時代であった。

刑場に果てる命を嘆きつつ書になりても生きたしと思う

生きて出ることなき鉄の獄の門
けさの曇りに響きつつ開く

ささやけるほどに間近に夜気あり
て今遠ざかる靴音を聞く

平尾静夫

これらの絶品の歌及び一年間に死刑囚の作った歌三百首を載せた『蟲になりても』という歌集を高知歌人叢書として出版した。その死刑囚の歌集は好評で飛ぶように売れた。このころは私の作歌も燃えた時代でもあったろうか。

毛剃りする刃のもと甲はぬ額あ
りて誰のものとしもなき潔き娘ら

S35

氷片のふれあふグラス運びきて
客らの愛語聞かぬ振りせり

S36

オリンピックスタジアムの中け
し粒の如き一人と坐しゐむ夫も

S39

日本歌人クラブ全国大会で、一位・二位・三位と続いて賞を頂いた。

第一歌集『暖簾のかげ』（昭和30年）、第二歌集『続暖簾のかげ』（昭和38年）、第三歌集『造礁珊瑚』（昭和46年）とこの頃までが私の作歌生活の青春時代とも言えよう。

オーバーも額垂るる髪も雪被き
今宵来る客みな美しく

憑かれたる短歌と思ふ階段を書
架としてわれの励み来たれり

生あるうちに一首でもこの世に残したいと入門してきた死刑囚、歌によって心が浄化され従客として死刑台に上ったという死刑囚に、歌の尊厳と功徳を思い、私も生ある限り歌い続けて、一首でも後世に遺るような名歌を作りたいものと念願している。

（高知歌人主宰）

土佐の赤土を焼く

――行住坐臥是レ修行ナリ――

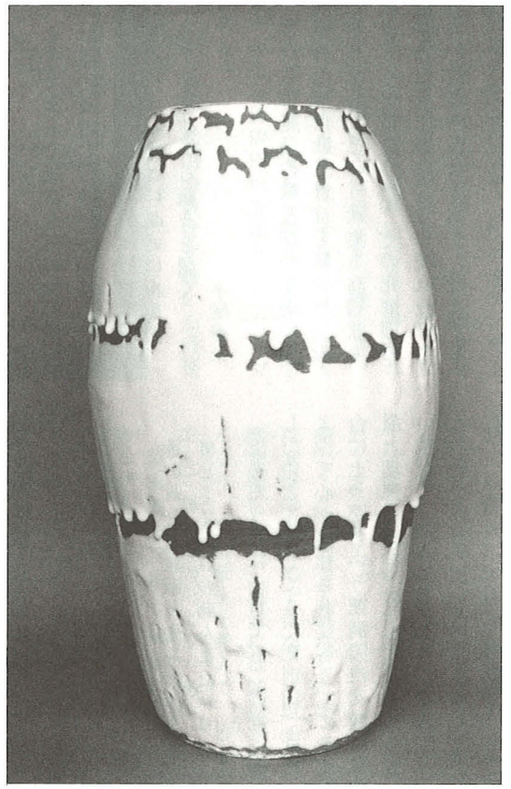
大崎　宣彦

焼き物をはじめて二十五年になります。焼き物というものは、全く、それを作る人の投影だと思います。もっとも、絵でも、書でも、詩を書くのも、作曲も、全部そうであるとは思いますけれども。

最初のうちは、なかなか思うようにできなくて苦労しました。よこしまな心があっては駄目なのです。うまくできないと腹を立てたりしていては、ますますできません。人の陰口、悪口、思い上がりの心などがあれば良い物はできません。お金儲けの心あれば、まず程遠いものしかできてきません。〝焼き物を作る心〟は、まず謙虚の心が最も大切と知りました。

草も、木も、石も、土も、それぞれに生きていて、それぞれの心があります。その心と通い合うこと、このことが非常に大切です。

最近、土の方から語りかけてくれるようになりました。私の思うように言うことを聞いてくれるようになりました。私も土の言うことを精一杯聞くことにしています。そして焼き上がった焼き物、それらの焼き物がほほえみかけ、語りかけてくれます。本当に可愛いものです。ですから、近頃また割らなくなりました。物置の中は一杯です。どうしても置き場がないとき、割ることがありま



す。ゴメンナサイ、ゴメンナサイと手を合わせます。無念、無想から無尽蔵へ行きました。

その昔、しばらくの間、サラリーマンをしていたことがあります。その時、カウンセリングの勉強をさせて頂きました。多くの貴重な臨床の場の経験もさせて頂いたのですが、つい最近、ちょっぴりそれが人のお役に立てそうな気配で大変うれしく思っています。

その人はある施設で働いているのですが、心の非常にきれいな方で（もちろん、お顔もですが）、手持ちのロジャーズ全集のうちの幾冊かをお渡ししました。私のアトリエで焼き物づくりをしながら、カウンセリングの勉強もできて行っているという、そんな感じです。

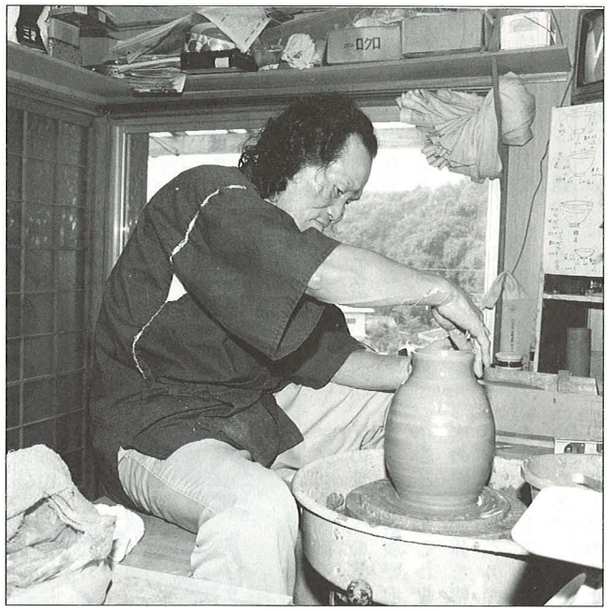
考えてみれば、私は、過去・現在・未来の生涯のすべてをそのままに受容してもらって、今、焼き物人生の中に育てて頂いている、そんな感じで、しあわせを感じています。

私の焼き物の世界というのは、一般的に人の敬遠する赤い土を使って、いわば良質の土佐の赤い粘土を生かしたものです。「備前よりも少し明るく暖か味を感じる」と、人は言ってくれます。

焼〆と、グレー・濃紺・あかね色とが混ざったような千年、二千年もの時間が凝縮されたと思わせる濃い焼〆、それに粉引、木灰藁灰を釉に

使った大ぶりの器などで、何れも土佐の自然を最大限に生かしたものと言えると思います。茶陶などが基本です。これが一つです。

もう一つは、陶板や立体などで、色・形・仕上がりなど全く自由な世界です。大小の陶板、各種各様の仕上げです。広い壁面に、半立体的な裸婦の群像・群舞するさまや、北国の凍る夕景などのような風物等、比較的大きい陶板を敷き詰めた作品などを今後は手懸けたいと思っています。



焼き物人生の一つのかたちは、極めて日本的な伝統的な陶芸の世界を踏まえて、それを大切にしながら（内包し、外縁では）、次の領域・無限の広さを、自己の時間・空間で、命を懸けて如何程に埋めていくことができるのか、にあると私は思っているわけですから。

ヨーロッパ各地や東南アジアなど、ぼつぼつ遍歴してみましたが、紀元前二千年、三千年のいろいろな物に触れ、時間空間に触れ考えることは、芸術の究極のものは……ということ。

これは人類の永遠の宿題ですが、またそれは、その時・その時代の歴史の中に厳然と遺されていくものであると言うことで、私にしてみれば、荒唐無稽と取られても、前へ進むこの道しかないわけで、その意味では私の焼き物人生は、私の人間としての生きざま、人生のすべてと言うことでしょうか。

時間ほど尊い、貴重なものはないと私は思っているわけで、〝時は命なり〟と自分に言い聞かせているのですが、時には柳町辺りに呑みにも行きますし、好きな作家・立原正秋の歩いた跡を歩いてみたり、メロドラマもよく見ます。音楽も聞きます。午前四時に起き、山歩きもします。〝行住坐臥是レ修行ナリ〟。私の焼き物人生の師匠です。

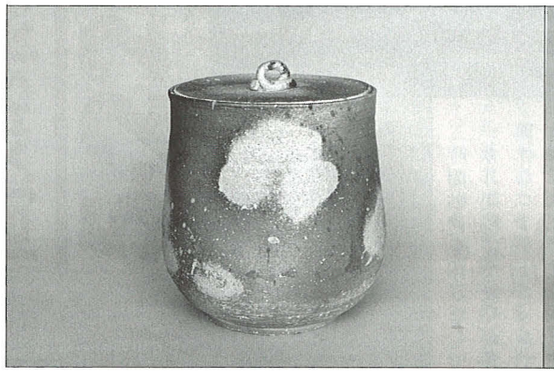
そういう中で、満天の夜空の星の中に素晴らしく大きな美しい虹を見たり、あるいは寒風の暗闇の山頂で、地底から聞こえてくる妙なるシンフォニーが、私を新しい色や形、発想へと駆り立ててくれます。

総じてそれらは、遍歴して、また各地の古い風物・歴史・民族諸々からの影響と合わせて、デッサンとなって積まれて行きます。だいたい今までは、二～三年かかって生命が吹き込まれて生まれてくるようです。

そういうことで、私の焼き物人生はいつも出発、発進の連なった道です。今も〝まさにこれから〟と考えています。

ただ、いい仕事がしたい。そのことだけを考えながら焼き物に取り組んで行きたいと思っています。

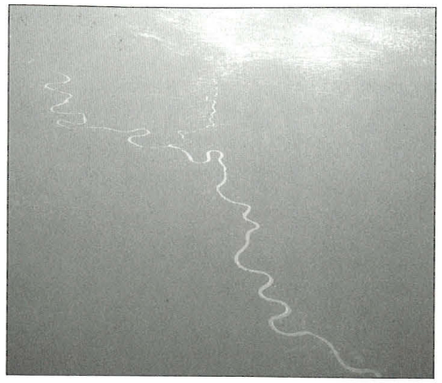
（陶芸家）



ビバ！アマゾナス

Ⅰ・時計の針は要らない

山崎　啓一

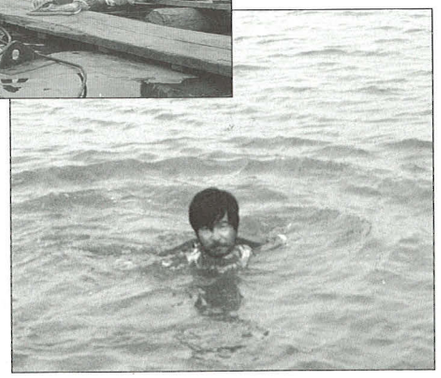


白く輝くアンデスを越えると、飛行機はエネルギッシュな積乱雲に包まれ、雲の切れ間から緑のジュウタンを敷きつめたようなジャングルが見えてくる。程なくあのアマゾンがその持てる力を誇示するかのように、右に左に百八十度の蛇行を繰り返し、歓迎のサインを送ってきた。私は未知への期待に、いつにない精神の高揚と緊張を覚えながら、ペルー・アマゾンの首都イキトスへ、この異次元の世界への第一歩を記した。エアコンの快適な機内よりタラップを降りると、まとわりつくような高い湿度の空気が体を締めつけてくる。リマの友人が「アマゾンの空気は濃くて重い」と言っていたのが実感のものとなる。

イキトスの波止場にて初めてアマゾンにまみえた。河口より四千km上ったここの標高は百五mで、河幅は二km、水深は百八十mもあり、海面よりさらに深い流れは水自身のすさまじい圧力で両岸をえぐりながら、ひたすら大西洋を目指して流れている。

「おんちゃん、ブラジルへ行く船はないかえ」「兄さん、河の状態がえいき全部出ちゅう。そこの樹へハンモックを吊って二週間ばあ待ちや」この波止場での遣り取りでも分かるように、アマゾンではその悠久たる流れと同じように時間も流れていて、ここでは時、分、秒を競っても仕方がない。イキトスよりブラジルのマナウスまで二千五百kmの船賃は八十ドルだが、船待ちを除いた所要日数が十日間で、金はかからないが時間をやたらと浪費する最高にぜいたくな旅である。

二度目のアマゾンはクリスマス休暇に友人のペルー空軍大佐の愛機C130で、ちょっと空の散歩をと招待を受け、エクアドルとの国境に点在する石油基地を訪れる機会を得た。軍用機によるしか交通手段がない油田は陸の孤島であり、ジャングルを切り開いた基地は風通しが悪く正に灼熱地獄である。ここの労働者は、十二時間勤務を休日なしで一カ月間続けた後一カ月間休むローテーションで働いており、厳しい環境がうかがえる。



三度目はウカヤリ河をプカルパからイキトスまで流れた。「おんちゃん、この船はいつ出る」「今日の夕方出らあよ」「よっしゃ、ざんじ荷物を取ってくるき乗せてや」……約束通り二日後の夕方乗船したら次の日に出港した。「船長、イキトスまで何日かかるぜよ」「四日で着かあよ」……これも言葉通り八日で着いた。時間的な会話に、「大体」とか「順調に行ったら」とか「寄り道しなかったら」とかを聞き手が適当に判断するこのおおらかさがアマゾンそのものです。

この八日間の船旅は格安でたったの二十ドル、しかし安いだけにそれなりの待遇は覚悟しておいたほうがよさそうだ。

さて、船に乗り込むとまず寝床の確保が問題である。三坪程の船室はインディオの家族で満員で、仕方なく甲板の手摺りにハンモックを吊る。この青空天井の寝床は、強い日差しとスコールさえ我慢すれば、夜には満天の星がきらめく宇宙の籠となり、マラリア蚊の羽音の子守り唄を聴きながら深い眠りにつくことができた。

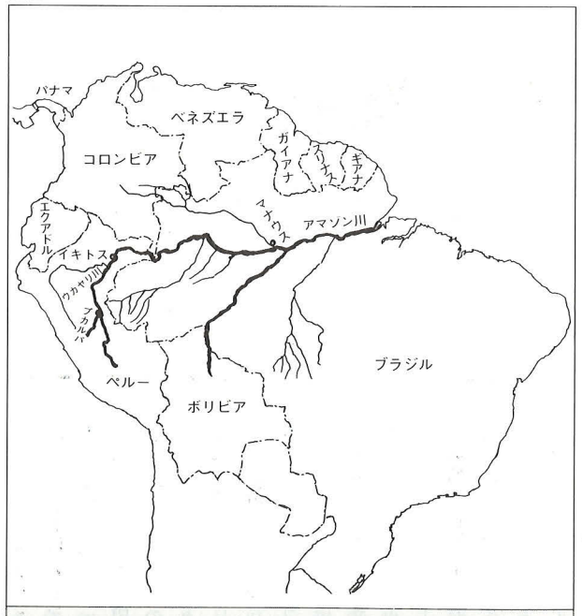
船旅唯一の楽しみは食事だが、三食ともナマズとバナナかキャッサバのスープという献立で、アンデスのモルモットのフライとイモムシスープが恋しくなってくる。そして喉の乾きには地球上の三分の一の淡水を集めるアマゾンの水を掬って飲む。この流域に住むすべての生物の排泄物とウィルスをミックスした水は、ちょっぴり甘味があり、最高の味をした水と言える。これがペルー・アマゾンでの食事だが、大国ブラジルではさすがに船の設備も良く、ステーキやバイキングとボリュームたっぷりの食事で、コーヒーや浄化水は飲み放題で、冷えたビールの販売もあり、毎晩甲板ではカーニバルとシバテン音頭の発表会が催され、踊り疲れると、船長が胴元の賭場でよいカモになってしまう。

船よりの眺めは気の遠くなるようなアマゾンの流れとジャングルと空だけで、人工的な物はめったに見えず、ひたすら自分との会話を楽しむことになる。河は百八十度の蛇行を繰り返しているので、最初の内は日陰を求めて甲板を右舷、左舷と行きつ戻りつするが、それも面倒になり、強い日差しのハンモックに一日中揺られながら、変わらぬ風景を眺めアマゾンに浸りきるようになる。

それが二、三日続くと文明病に冒された脳に陽が入ったのか、日の経過が分らなくなり、自身が実存のものか架空のものかさえ分らなくなり、仕舞には自分がアマゾンそのもののように思えてくる。こうなると怖いものはなくなり、火を追いかけ焚火に飛び込んできて焼け死ぬまで暴れまわる危険な毒蛇シュシュッペが居る岸辺の草むらをサンダルで歩き回り、波止場毎に河へ飛び込んで泳ぐようになり、とぐろ虫も時々流れてくる水（熱帯では脱水症状で大便が水に浮くことがある）を平気で飲めるようになる。これがアマゾン・ハイと呼ばれる悟りの境地である。このハイな状態は特に奥アマゾンを旅する人に強く出るようで、わずらわしい情報もなくまたその必要もない、時間を越えた異次元の世界での現象と言えよう。

そんな仙人のような心境になったある日、甲板でまどろんでいるとバタバタとオニカマスが飛び込んできた。さすがの仙人もカマスの塩焼きに心を乱され、早速煙突の余熱でバーベキューとあいなった。アマゾンでカマスとは意外だが、この巨大な河にはイルカをはじめスズキ、イワシ、ニシン、フグ、エイなどが淡水化して千七百種の漁（大西洋の魚は千三百種）が生きているから、海以上に神秘的な世界である。

（地方公務員）



アマゾン河はベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、ブラジルの６カ国に源を発する流域面積630km²、延長6500kmの大河で、世界の淡水の３分の１を占め、流域のジャングルより地球の酸素の３分の１を供給する水と緑と空気の原点で、地球最後の聖域といえる。

先住民インディオは、２～３万年前に氷結したベーリング海峡を渡り南下をしたモンゴロイドの子孫である。

ワンマンバンドに魅せられて

有沢　晃一

近代文明社会のあらゆる部門に、パッと花を咲かせて生まれてきた最も新しい学問に、電子工学がある。音楽が人生の生き甲斐であった私に、活を入れてくれたのが、この電子工学の所産である数々の新楽器である。これらで奏でる新しい音楽がこのたびの『第一回全国ワンマンバンドカーニバル』と言うコンテストで優勝させてくれたのであった。これをきっかけとして、我が身辺は俄に慌ただしくなってきた。

「ワンマンバンドについて」の原稿を依頼され簡単に引き受けはしたものの、文筆は幼少の頃より苦手であった。成人してからも文学的な文章は二～三ページも目を通していると睡眠剤の代用になってしまう。さりとてこの関門を避けていては、新しい仲間は増えてこない。ここはどうしても二十八歳の青年の無き智恵を振り絞って書かざるを得ない。

さて「ワンマンバンドとはなんぞや？」と大半の方が思われるだろう。一口で言うと、一人で演奏すると言うことである。「なんだ、それじゃあフォークギターかピアノなどの弾き語りではないか」と思われるだろう。確かにそれもワンマンバンドの一つである。しかし、今や音楽の世界にもコンピューターが導入され、シンセサイザーという鍵盤楽器で他の古典的楽器（オーケストラサウンドや民族楽器）や未知のサウンドも作り出すことが出来るようになってきた。そのことが一人で演奏することどのような関係があるのか、もう少し掘り下げてみよう。

コンピューターが著しく進歩した今日では、音を録音する技術も制御するようになってきた。それは家庭用で使われているカセットテープレコーダーとは異なり、一度録音した音に別の音を何度も重ね合わせることが可能だ。つまり、シンセサイザーでバイオリン、チェロ、ビオラなどの音を重ねて弦楽四重奏も一人で出来る訳だ。さらにある特定の失敗箇所を部分的に修正することができる。これを身近な例で言うと油絵に類似点がある。気に入らない箇所を何回でも塗り替えることが出来るのと同じである。また、楽器のほとんど弾けない人でも、コンピューターのキーボードを使って音符を入力し、演奏・録音が可能になったことは特筆に値するだろう。以上のように電子工学で生まれた諸々の新楽器（機械？）をあやつることによって生まれる音で遊べるすばらしい音楽の世界が今流行のワンマンバンドの代表的なタイプと言えよう。

だが一方で音楽に詳しい方なら「コンピューターミュージックは、機械的で冷たく好きじゃない」と言われる人もおいでだろう。その原因はコンピューターにまかせっきりだと、音程も、リズムも、寸分の狂いもなく演奏をしてくれるところにあると思われる。ところが実際の有名な楽器演奏者のプレイは、音量に起伏があり、リズムにうねりがあり、時には音程すらもわずかながらズレる場合があり、そこが人間的な温かさを感じる所以である。そういう譜面で表わせない人間の感性をも最近のコンピューターは入力出来るのである。

ところで、私は、個人的には小編成のバンドも平行して行っているが、やはり個々の集まりである以上、当然意見の食い違いも出来、妥協点を捜していく訳だが、これが仲々ごっそう揃いで一筋縄ではいかない。その点、ワンマンバンドは誰も文句を言う人がなく、すべて自分の思い通りにドラマーが叩いてくれ、トランペッターは高らかに吹き上げ、バイオリニストは美しく奏でてくれる。何せ、相手はコンピューターであり、フレーズ（音）に間違いが無く自分の主義主張を表現してくれる。これは土佐のいごっそうにはぴったりのバンドだと思う。高知市政百周年を記念し、老いも若きも共に高らかに歌いあげようではないか。

（地方公務員）

ふる里の味

りゅうきゅうは、『土佐方言集』（宮地美彦著）によれば、「里芋ニ似テ、葉、茎、芋何レモ白ク、茎ハ夏、揉ミ又ハ煮テ食スル。琉球カラ渡来シタルモノ故、斯ク称スルノテアル。土佐デヨク出来ルカラ茎ハ料理ニ賞用スルガ、芋ハ用ヒルモノ少イ。（以下中略）……」とある。

りゅうきゅうはどんな陰地でも育ち、外側の大きくなった茎から順に切り取っていくと次から次に収穫できる。そして、親芋は一年限りで終わるが、子芋が残って、冬、霜にさえ気を付ければ何年でも増え続ける。「りゅうきゅうは月夜の晩に盗んで来て植えろ」という言い伝えがあるが、人に頼んで譲ってもらうと気をつかって親芋をくれるので、まわりについている子芋をこっそり盗んで植えた方がよいということを言ったものである。

りゅうきゅうは酢もみ、煎り煮、みそ汁の実などにすると非常においしいが、茎の汁が手につくとかゆくなる人もいる。

鏡村では、六年程前から村おこしの一環として数々の一・五次製品を生み出している。「ほけきょ漬け」「梅ジュース」などなど。その中心となっているのが〝鏡村生活改善グループ〟で、村で採れる山菜や作物の商品化に向けて試作研究を行なう。そして、これならいけるとなったら農協に提案し、ここで製品化していくシステムである。「りゅうきゅう寿司」もここから生まれた。

りゅうきゅう寿司には塩漬けしたりゅうきゅうが使われる。収穫期に葉と筋をとり、内側に包丁目を入れ、平らな状態で塩と交互に重ね、おもしをする。こうして塩蔵に入れておけば三～五年は保存できるので必要なときに取り出して使うことができる。

《りゅうきゅう寿司》

材料　米一升・水・酢200c.c.・砂糖200g・塩30g・生姜50g・ごま大さじ3・甘酢（酢300c.c.・砂糖300g・みりん50c.c.）、りゅうきゅうの塩漬け適量

作り方　①りゅうきゅうの塩漬けを一晩水にさらして塩抜きをする。②水気を切り、二～三時間甘酢につける（ゆず酢を加えるとなおよい）③米を固めに炊き、分量の調味料、みじん切り生姜、ごまを混ぜ合わせ寿司飯を作り、適当な大きさにまとめる。④③の上にりゅうきゅうを広げ、まきすでぐっと形を整える。⑤一～二時間置き、適当な大きさに切って鉢に盛りつける。

こうしてできた寿司は、目にも鮮かな緑色でシャキシャキとした歯ごたえで実に美味しい。同様にみょうがの塩漬けを利用してつくるみょうが寿司は梅酢で色をつける。赤いみょうが寿司を添えると、さらに彩がよく、食欲をそそる一品となる。

高知の明日を考える　**高知レポート**　豊富な資料と論考

新刊●高知レポート２
いかにすれば都市の河川はよみがえるか
今井嘉彦著　Ａ５判　108頁　定価1,000円
病んでいる都市河川を回復させるための大胆な提言を、具体的な事例と資料をもとに述べた好著。

最新刊●高知レポート４
土佐の自由民権運動
外崎光広著　Ａ５判　156頁　定価1,000円
土佐における自由民権運動に対する誤解・偏見等を正し、その役割を語るうえで欠かせない、土佐人必読の本。

中学生・それぞれの時♥第5回

〝ちょっといい話〟

沢田　智恵

※

一学期最後の書写の時間のことである。『始め』の号令が終わるや否やT君が立ち上がって「先生、質問があります」と言う。

「何でしょうか」

「たとえば、書道の忘れ物は一回しかなくて、態度もまじめで、熱心で、作品がまずい場合、何点がつきますか」

「さあねえ。T君が先生だったら、こんな場合、何点つけるつもり？」

「はい、5点です」

「あらそう。みんなはどう？　今の例はT君自身のことやと思うけど、5点やってもいい？」

「いかん。T君は自分のこと誉めすぎや。私語しゆうもん」

いっとき学級全体が活気づく。

「T君、そんなに5点が好き？」

「好き好き、大好き。お母さんはもっと5点が好き」

あとは爆笑の渦であった。

※　※

二年前のことである。一年生の国語の時間に「ちょっとみんな、授業に関係ない話やけどしてもいい？」

「えいえい、どうぞどうぞ」

「この前ねえ、ちょっといいなあと思うことがあってね。あるクラスのガラスが割れて、だれかが職員室へ連絡に行くと、若い主任の女先生が飛んで来て、一番最初に言った言葉が『みんな、けがはなかった？　理由はあとで聞くから早く片付けよう』すごいろう？　普通だったら『どうしよった。だれが割ったぜ。ほたえよったろう。弁償してもらうよ』という言い方が多いもんね。その若い、女先生にちょっと感動したよ」

「沢田先生やったら、どういうつもり？」

「そりゃあもちろん、みんな怪我はなかった。ガラスは割れるもんやから仕方ないよねえ、とか言うつもり」

「うそお!!」

「ぼくらぁの主任はどういうろう？」

「今度ガラスを割ったとき試してみたら？」

「うんうん、そうしよう」

ところが、その日の昼休みのことである。猛スピードで廊下を走っていく男の子とすれちがった。

「ちょっと、あぶないやか。Y君どうしたが」

「あっ、先生、大変や。今ちょうどガラスが割れたき、早う主任の先生に言うて確かめんといかん、一番最初に何と言うか」

あっけにとられてY君を見ると、鼻の頭に汗をかいて息をはずませているのであった。今まで見たこともない真剣なまなざしに圧倒されそうであった。

これには後日談がある。結局Y君の主任のせりふは、「どうしよったな、またほたえよったろうが」であったそうである。その主任曰く「ガラスが割れたと言うき『どうしよったな、ほたえよったろうが』と言うと『やっぱり……』と言うなり、がくっと肩を落として出て行ったけんど……」

話もここまでくると深刻になる向きがある。げに口は災いのもとである。気をつけなくては。

※　※　※

クラス四十余名の生徒全部がじっと授業に集中している時ほど、教師にとって気持ちのいいことはない。言い古された言葉であるが、まさに教師冥利に尽きるという表現がぴったりである。そんな気分に浸っているとき、突然関係のないことを言ったり、ぼぉーと他事を考えている生徒がどこのクラスにも一人や二人はいるものだ。

前任校でのことである。その学校は筆山の近くだったので、四階の教室からお墓が一望のもとに見下ろせた。三年生の一人の男子が退屈そうに窓から外を見ている。〝この私の授業によそ見をするなんて……〟カッーとして睨みつけると「先生!!」と先を越されてしまった。

「えっ、何？」と少し気持ちを抑えたとたん、「先生、お墓が一つ増えちゅう」と言う。その子は、ただぼんやりと外を見ていたのではなかったのである。お墓の数を正確に数えていたのである。そう言えば、いつだったかこの子が『心霊写真集』という本を貸してくれたことを思い出した。

※　※　※　※

いわゆる転勤族を親に持つ生徒たちが、自分の意に反して転校して行く時の光景は、いずれの場合も背中に涙を隠しているという感じがしてならない。ことに、春休みや夏休みなどに転校されると、始業式の日の空席が目立ってたまらなくなることが多い。転校していく前日まで学校にやって来て「城北中にいたかったのに……」などと愚痴られると励ましようがなくて、「どこだっていいじゃないの。また、新しい学校で、新しい友達を見つけたらいいやいか」などとありきたりのことしか言えなくなる。

一年生のS君が夏休みに転校していく時、出発の日の午前中まで野球部の練習に励んでいたというのは、今も強く心に残っている。このS君から九月に入って学級へ部厚い手紙が届いた。

「一年四組のみなさん、そして沢田先生、お元気ですか」という書き出しであった。「沢田先生、そして一年四組のみなさん」でないところが頗るいい。入学して四カ月、せっかく親しくなれた級友たちへの思いが強かったのであろう。S君は一年四組の一人ひとりにメッセージを書いてあった。あの憎っくき私語の王者K君には「K君へ、授業中に聞いたプロレスの話、スリルがあってとてもおもしろかったよ。もう一度聞きたいな。」前髪の長かったツッパリのA子さんには「A子さんへ、眉が見えた方がきっとかわいいよ。」こういう調子で四十一名への一言が実によく効いているのであった。生徒たちは、私の読み上げるメッセージにじっと耳を傾け、うなづいたり、「わぁー」と感嘆したり、それぞれの反応を示した。

S君、今ごろどうしているかなあ。たしか宇都宮市の方へ行ったと思うけど、あれからまた引っ越してしまったのではないかしら……。あの時の手紙、先生は完全に負けていたと思う。みごとだったよ、S君。

――――――――――――

中学校三年間に、生徒たちはいろいろな意味においてめざましく成長していく。多少の揺れはあても、おおむね同じ坂道を登っていってほしいものである。

（高知市立城北中学校教諭）

高知市近代年表（十三）

昭和十五年（一九四〇）

1・28　川渕洽馬市長重任

4・22　生活必需品切符制採用

5月　土佐セメント、浅野セメント高知工場となる

11・1　国民服制定

昭和十六年（一九四一）

1月　服部直彰知事に就任

7・12　土佐交通株式会社（土佐電気、土佐バス、高知鉄道合併）設立

7・16　大野勇市長となる

9・1　高知新聞、土陽新聞を合併する

12・8　日本、米英に宣戦を布告、太平洋戦争はじまる

昭和十七年（一九四二）

3・31　県電気局閉鎖、ついで四国配電株式会社高知支店として発足する

6・1　高知市、浦戸湾周辺十カ村を合併（一宮・布師田・朝倉・鴨田・三里・五台山・高須・長浜・御畳瀬・浦戸）

7・7　沖野悟知事に就任

昭和十八年（一九四三）

4月　高知市立高等女学校開校

4月　県立高知師範、女子師範両校が合併して国立高知師範学校と称する

6・4　戦時衣生活簡素化実施要綱を決定。八月には商工省令を以って反物の長さを制し、長袖の和服やダブル背広服など非必需品六百余種の製作・生産を禁止した

6月　学徒動員始まる

6月　食糧増産のため、市内の空閑地は甘藷や南瓜、野菜類栽培に利用され、高知公園の一部も開墾された

7・1　高橋三郎知事就任

7・30　高知商工会議所解散

10・1　高知県商工経済会発足

10・10　日本銀行高知支店開業

昭和十九年（一九四四）

3・21　土佐記念館を帯屋町に設立。南学によって培われた土佐先哲の遺墨や遺品を陳列し、郷土研究資料を備えて士気の高揚をはかろうとしたが、翌年七月四日の空襲によって焼失、そのほとんどが姿を消した

5月　合同運送、県陸運、県運送会社設立

6月　県内バス会社統合

9・7　県軍需工業会発足

12・17　土佐観光協会設立

昭和二十年（一九四五）

1・19　米B29爆撃機が神田吉野を爆撃

4・1　県立女子医学専門学校開校

4・21　栗原美能留知事となる

7・4　高知市大空襲（罹災面積百二十六万六千四百坪、罹災戸数一万千九百十二戸、被害人員七百十二名）

7・16　大野勇市長重任

8・6　広島に原子爆弾投下される

8・9　長崎に原子爆弾投下される

8・15　終戦

9・8　特別警備隊を丸の内に設置

10・30　永野芳辰知事に任命される

11・2　ロレンス大佐指揮の連合軍高知に進駐する

長い間ありがとうございました。今回をもって終了させて頂きます。

子どもの参加で飛躍

第3回こどもの本を語る高知大会

浜垣　昌子

夏が近づくと〝子どもの本〟の好きな仲間があちこちから集まって、私たちのまわりは不思議な興奮につつまれる。「こどもの本を語る会」を開こうというのだから、もっと静かなものかと思うのだが、心の底からわきあがった力につきあげられるようにみんなの気持ちがひとつに結ばれて実行委員会が生まれる。教師あり、会社員あり、図書館員あり、家庭文庫をしている者、専業主婦と、立場もさまざまならば年齢も二十代から五十代まで大きく開いた異色のグループの発足である。これほどまでに私たちを夢中にさせるもの、それは炎天下の一日を力の限り踊りぬく〝よさこい祭〟の熱気と似ているかもしれない。

ともあれ、今年も実行委員の知恵と力を結集した「第三回こどもの本を語る高知大会」が七月三十一日に潮江市民図書館で開かれた。私にとっても三度目の実行委員としての参加であった。

実行委員会で、今年の大会の講師が氷室冴子さんと決まり、超多忙の彼女が思いがけないほど快く来高を承諾してくれた時、私は正直なところ複雑な気持ちであった。氷室さんが中・高校生の女の子を中心に大変人気のある作家だとは十分承知していたし、ヤングアダルトの読み物が注目されている今の時代、この世代にスポットをあてることには大賛成でもあった。だが、しかし……と思った。

どちらかというとオーソドックスに児童文学を読んできた私である。真面目でカタイと言われればそうなのであるが、できれば講師としてお招きした方とは本当に心を開いて真剣に話し合いたいと思っていた。欲を言えば、今回限りのおつき合いでなく長く高知に親しんでほしいとも願っていた。そんなことを考えた時に（氷室さんを知ってしまった今はちょっと恥かしいのだけれど）流行作家というイメージが強すぎて心配だったのである。

ただ、一方では大人だけのものとなっている「こどもの本を語る会」に中学生や高校生がつめかけて来てくれることになれば、それは素晴らしいことだという気持ちもあった。実際、当初は複雑な心境だったのである。

しかし、氷室さんの作品をいくつか読むうちに、また高校生の娘と作品について話し合ううちに、私もだんだん氷室さんにお会いしたい気持ちがふくらんでいった。

大会当日は、講演よりももっと気楽なおしゃべりの会を、という講師の意向に沿って、はじめてパネルディスカッションの形式をとることになり、午前中の時間をそれにあてた。パネリストには、昨年の大会のゲストであり、それ以来、実行委員とも仲良くなって赤木かん子さん（児童文学評論家）もかけつけてくれた。午前中の参加者が約二百人。大変好評であった。氷室さんの人間性や、彼女と赤木さんとの組み合わせのよさに大いに負うところがあったとは言え、何度も会を重ね、随分勉強したスタッフの実力もなかなかのものであった。〝新しい作家・新しい作品〟という大会のテーマもよかったと思う。

午後は話し合いに入り、第一分科会「読ませたい本、手わたしたい本」には赤木かん子さんが加わってくれて六十名の参加、厳しく本音でぶつかり合う会になった。第二分科会「読書会ワイド――氷室冴子の本」には七十八名の参加、氷室さんを囲んで小学生から大人まで対等に意見交換をしたことは私たちにもうれしいことであった。

爽やかな印象を残して高知をあとにした氷室さんに、私は珍しくファンレターを書きたい気分である。だれの話も一生懸命に聞いて、知っている限りを話そうとするひたむきさが好きだった。自分をありのままに表現する素直さも、〝瑠璃姫〟をおもわせるちょっとやんちゃな雰囲気も好きだった。短い滞在で鏡川まつりを楽しみ、土佐の海で泳ぎ、健康的な食欲が快いほどであった。

心強い同志になって下さった「文化振興事業団」、そして熱いカンパをお寄せ下さった大勢の人たちに心からの感謝を捧げ、また来年の夏も「こどもの本を語る高知大会」でお会いできることを祈りつつ―。

（主婦）

私の風景

坂本　巌

井口町江ノ口川上流

戦中・戦後、この付近に住み、洗濯をしたり障子を洗ったりしていた川。雨が降って増水した時にうなぎを採ったことを思い出す。すっかり様相を変えてしまった今も、ここに遊ぶ子どもたちの表情は変わらない。

それぞれの仕事

編集者

杉村　雅子

書店でフツーに目にする大出版社発行の雑誌では、純粋な編集の仕事がされているようですが、月刊「土佐」ではなんでもみんなでするので、どれが雑誌の編集の仕事なのか、まだよくわかりません。

作文が大の苦手だった私が、なんとか勤めていけるのは、この「なんでも」のせいだと思います。文章を読んだり校正をしたり、取材をして記事を書いたりすることのほかに、印刷のもとになる版下を作るためのキッタハッタの仕事や、写真の撮影や現像、焼き付けなどをするのです。専門家の方に委託するのにも、一通りわかっておくと余計な手間を省けるのだそうです。

この仕事に就いたおかげで、歴史や民族学、写真など、これまでの自分からは思いもかけぬものに興味を持つことができ、なにもかもがおもしろく感じられます。とくに特集の取材は、常識では考えられないようなことに、編集スタッフ全員が大真面目に取り組むので、始めのうちは家族が心配したほどです。

月刊「土佐」第二十六号の特集など、タイトルこそ「風俗関連営業第三号」と硬いのですが、実際したことは高知市およびその周辺のラブホテルの調査でした。五十四軒のホテルを訪れて写真を撮り、料金を調べ、あるホテルでは「二十四時間ウォッチング」をしました。入口付近でじっと待ち、車のナンバーを頼りに入退室をチェックして、各時間帯の利用者数や利用時間を調べるものです。まるで探偵社に入ったようだと、けっこう楽しめました。この七月に発行した第三十九号では「シケモク拾い」までしてしまいました。五台山のミニ八十八ヵ所めぐりや沖の島の石段の上り下りなど、仕事でもなければ絶対しないようなこともやってみて、一度はやっておくのもいいかな、と思ったことです。

特集のほかにもいろんなコーナーがあり、興味あることはどんどん仕事に結びつけられます。はじめ建築を志していた私は「歩きテクちゃあ西東」というコーナーを担当させてもらい、好きな建物を勝手に取材しています。ただし作文が苦手だったという事実は消し難く、いまでも赤エンピツにおびえる毎日です。

それでも、読むだけよりも作る方がずうっと面白いのです。

読書グループ窓

新しい感性を求めて

渡辺　智恵

三十年も前のことですが、潮江小学校のＰＴＡ文化部に読書会ができました。地区に図書館のない時代でしたから、毎月当番が市民図書館へ行き、借りてくる本の回し読みでした。やがて子どもたちは卒業しましたが、親たちは読書を通して語る楽しさを断つことができず、十数人で読書グループ窓を結成しました。昭和三十四年のことです。

相変らず当番が借りて来る本に、読後感想ノートをつけての回し読みが長く続きました。

三十六年に待望の潮江図書館ができ、そして小さかった図書館は、現館へと飛躍します。それにつれて窓グループも少しずつ変わりました。結成以来つづいている月例会は、会員宅から図書館へ移り、現在は第四火曜日の午後もっています。会員はいま十人です。地元図書館の開館に伴い個人の本選びに移り、感想ノートも中止。代わりに文集「窓」を年一回、発行しています。この表紙は一冊ずつ手描きの色彩がうれしい文集です。昨年は思いがけなく県立図書館で展示していただき、読書会は二度目の表彰を受けました。

例会では数年前から、朗読と、その内容について自由な発想の解説と意見の交換を楽しんでいます。「牛久沼のほとり」には二年かかり、「奥の細道」「樋口一葉」「土佐日記」と続きます。今後も古典を読む計画をしています。

古いグループですが、新しい感性を求めて、私たちに卒業はないようです。

（読書グループ窓世話人）
連絡先　四五―七三八三

アマチュア劇団笛の会

平和の笛を吹き続けて

多田　智昭

私達の劇団が結成されたのは、昭和三十三年の六月でした。今年は劇団創立三十周年ということで、先日（七月十六日）記念公演を行いました。

劇団の生みの親とも言うべき西村純一氏が亡くなられて二十年近く、結成時のメンバーは一人もいませんが、〝いつまでも平和の笛を吹き続けていこう〟という劇団笛の会の〝心〟は今も受け継がれ守られています。

劇団としては、春の高知市文化祭、秋の県芸術祭の年二回の公演を主体に、地方公演等も行ってきました。

私達の劇団は決してスマートではありません。東京の商業演劇と同じことをしても意味がない、高知で生活する以上は、土佐という風土をしっかり見つめ、そこからの広がりを演劇の場に、と活動をしているからかも知れません。また、創作劇を主体にしてきた劇団の方針によるものかも知れません。

劇団には、結成時は別にして、専門的に演劇を学んだ人間は一人もいません。一つ一つの舞台の積み重ねが勉強の場となってきたわけですが、これからは、山下一、西森良子等演技歴二十数年のベテランを中心に、中堅、若手の力を伸ばしていこうと思っています。稽古場や資金面等の困難な問題は続くでしょうが、来年は高知市制百年でもあり、本格的な〝土佐〟を主体にした創作劇を上演したいと思っています。

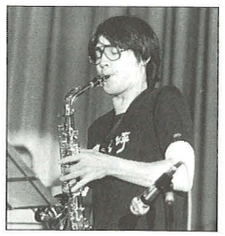
（劇団笛の会代表）
連絡先　七三―三七五一
八四―四四二四

卑弥呼ばんど

満足のいく音作り目指して

高橋ひろみ

今からちょうど五年前、喫茶『卑弥呼』に集い来るジャズ好き仲間が集まって、どうせならリスナーよりも楽器を持って演奏を始めてみようとつくったのが「卑弥呼ばんど」。



当初のメンバーは、過去にブラスバンドをやってた人やプロのバンドマン経験者などで、一応基礎は理解できる集団としてスタートしました。でも、転勤その他の事情でメンバーがほとんど入れ替り、現在は医療従事者、郵政省、エンジニア、タタミ職人ｅｔｃ、ほとんど全てが専門的な音楽教育を受けたことのない者ばかり。ただ、音を出すのがメシを食うよりも好きという事で、バンドのメンバーとなったのです。その数約二十名。

目標は〝ジャズのような音作りがしたい〟ということなのですが、楽器は揃ったが音が出ないだの、演奏会前日にまだ曲が仕上っていないだの、本番ともなれば足はガクガク手には冷や汗、いざ演奏となると一朝一夕には行きません。

と言っても、平和コンサートがあれば平和の歌を、○○保育園夕涼み会があると言えばお子様向きの曲を、よさこい踊りには地方車に乗ってジャズ風にアレンジしたよさこいをと、様々な分野の活動も行っています。今年十月には二回目のコンサートを開く予定。

各人各様の人間集団が、ただ満足のいく音作り目指し、ステージ発表を夢見て、練習に明け暮れている、というのが今の「卑弥呼ばんど」の現状なのです。

（卑弥呼ばんどアルトサックス）
連絡先　四四―〇八〇九
（旭診療所・高橋）
四四―六九一六
（喫茶「卑弥呼」）

喜多流謡曲翁会

和気あいあいと謡曲

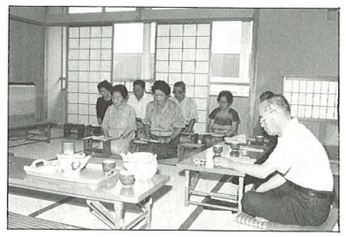
吉本　稔

五、六年前、老後の楽しみにと、かつて喜多流をやっていた仲間数人に声をかけて始めたのがこの会です。年寄りばかりだからと、その名も翁会としました。

しかし、毎月例会の案内を新聞の『伝言板』に出したところ、「私も昔やっていた、ぜひ仲間に入れてほしい」「謡曲は一度もやったことはないが、聞くだけでもいいから参加させてほしい」という人が次々に現れて、現在では会員が二十二名になりました。それにつれて例会の場所も愛宕町婦人会館から潮江市民図書館に移り、四年目を迎えています。

例会は毎月第一日曜日の一時から五時までで、一回に四曲（男組二曲、女組二曲）を謡います。当日は、なるべく多くの方が謡えるように、くじ引きでシテ（主役）・ワキ（脇役）・ツレ（従者）などの役割を決めます。翁会の場合、月例会がそのまま発表会なのです。

年の始めには一年間に謡う曲目を全て記載したスケジュール表を全会員に配ります。それを見て、本を揃え、知らない曲であれば例会までに親しい方に習い、また初心者の方は例会で聞き手にまわり小声でついて練習したりと、参加形態は様々ですが、発足以来一度も欠かさず例会を続けてこれたのは、和気あいあいとした会の雰囲気のおかげでしょう。気心の知れた仲間が集まって、腹の底から声を出し、曲の合い間にはお茶を飲んで世間話、ほんとうに年齢のことも忘れて気分ハツラツです。



（喜多流謡曲翁会世話人）
連絡先　八二―五九四九（吉本）

ふだんよく利用している市民図書館、気を付けないと見落しがちですが、その入口には『市民の図書館』（福原云外書）と刻まれています。これは昭和42年、図書館改築の際に設置されたもので、施設の名称ではなく、点字図書館と市民図書館の併設により「いつでも、誰にでも本に親しんでもらえる、みんなの図書館です」という新図書館の精神を表したものとのこと。

風伯

アレンジ

先ごろ内藤法美（ほうみ）が死んだ。越路吹雪の夫としての名前が一般的だが、かつての〝東京キューバンボーイズ〟の名アレンジャー（編曲者）としての彼は、戦後日本のラテン音楽ブームを陰で支えた存在だった。

越路との結婚以後は彼女の毎年恒例となったリサイタルでのすべてのアレンジを担当し、円熟期から生理的には下降線を辿りつつあった越路の唄を、その見事な技術により、最後まで第一級のステージとして作り上げ続けた。

もともと、文化とは創造であると共にアレンジメントでもあるものだ。例えば坂本龍馬。彼の行跡を子細に辿ると、彼が卓越したアレンジャーであったことがよく分かる。彼は知識として吸収した海外の諸情報を、実に独創的なアレンジメントにより当時の日本及び日本人に置き換えてみせた。

しかし、文化に限らず、我々土佐人は一般的にどうもこのアレンジメントが不得意であり、また重きを置かない面がある。アレンジをすることは自己の価値観に柔軟であることが要求される為であろうか。

実を言うと、冒頭の内藤法美に多くを割いた最初の原稿が「文化高知」のコラムだから、もっとローカルな話題を中心にと編集部から手直しを求められ、私は構成の変更に四苦八苦した。私もまた、アレンジの才が決定的に不足する土佐人だった訳だ。そして、この小さな楽屋落ちをここに書くのは、これこそ実に「高知」的なエピソードだと思うからである。

（南北）

潘寅林（パン イン リン）バイオリンリサイタル

一九四七　上海生まれ
一九六九　上海交響楽団コンサート・マスター就任
一九七二　ソロで活躍
一九八一　読売日本交響楽団入団
一九八四　同団コンサート・マスター
　　ソリストとしても活躍中

《演奏予定曲目》
モーツァルト「メヌエット」
ブラームス「ハンガリー舞曲1番」
リスト「愛の夢」　他

●日時　9月17日(土)午後6時　開場
　　6時半　開演
●場所　高新文化ホール
　　（高知新聞放送会館七階）
●入場料　前売り　二、五〇〇円
　　（当日　三、〇〇〇円）
●チケットの販売　高新プレイガイド
　　文化振興事業団
●主催　高知市文化振興事業団
なお、詳しくは事業団まで電話でお問い合わせ下さい。

『世界は広いぜよ！夢芝居　坂本龍馬』

—ふれあい・円形劇場—

関東・東北・北海道の中学校百七十三校での上演実績を持つプロの劇団で、学校の体育館のど真中に直径8mの円形のステージを組み、劇中に観客も参加する等ユニークな公演で話題を呼んでいます。この機会にぜひご覧下さい。

●日時　10月16(日)午後1時30分～4時
●場所　城西中学校体育館
●鑑賞券　一、五〇〇円
●チケットの販売　高新プレイガイド
　　文化振興事業団
●主催　高知市文化振興事業団

文化セミナー

▼森本忠夫氏
（東レ経営研究所社長）

「ソ連の現状について」
—ペレストロイカは成功するか—

●9月27日(火)　午後3時～午後5時
●於　高知共済会館　3階金鶏

▼板倉聖宣氏
（国立教育研究所物理研究室長
仮設実験授業研究会代表）

「創造の時代に生きる」

●10月15日(土)　午後7時～午後9時
●於　高知市職員研修所
　　（高知電気ビル4階）

▼佐橋慶氏
（アイデアバンク社長）

「余暇に文化を」
—新しいライフスタイルの創造—

●10月21日(金)　午後3時～午後5時
●於　高知共済会館　3階金鶏

セミナーに参加を希望される方は、電話又はハガキで事業団までお申し込み下さい。当日、直接会場の方へおいで下さっても結構です。参加費無料。

ミュージカル RYOMA
来年10月28～29日上演に向けて
制作スタート

くわしくは☎73—4365ミュージカル龍馬制作委員会までお問い合わせ下さい。9月20日〆切。

参加者募集中！

出演者養成講習会(10/4～11/1)

MUSICAL SCHOOL

主催●(財)高知市文化振興事業団　制作●ミュージカル龍馬制作委員会

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8-14869